

# にゃにゃにゃにゃ







いぬいぬいぬ

# 登場妖怪紹介



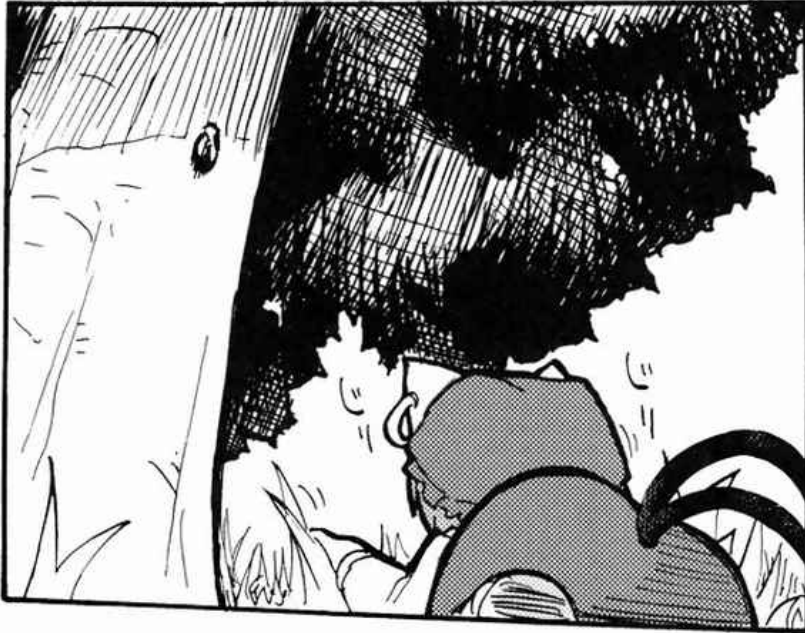
◆橙◆ (ちえん)  
八雲藍に仕える式神。  
本来は人を驚かせる程度の  
能力しかない化け猫。あほ。

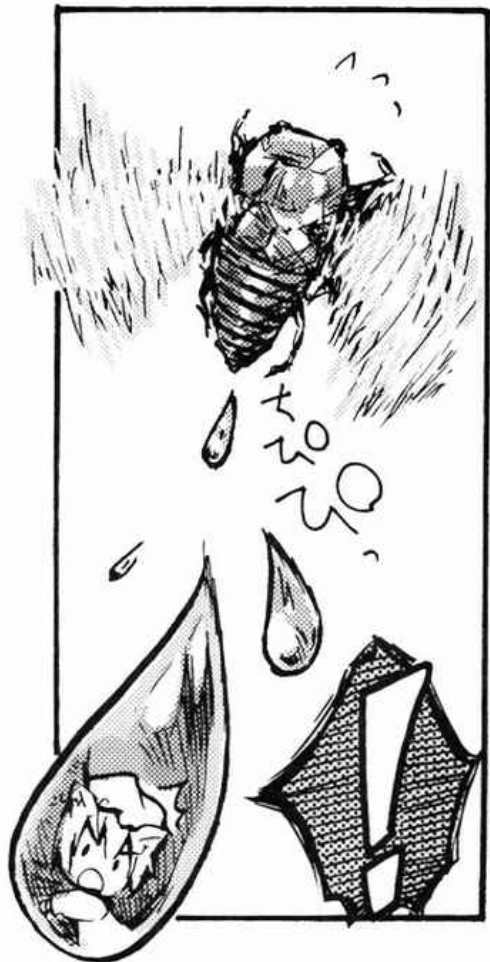
◆八雲藍◆（やくも らん）  
八雲紫に仕える式神。橙を溺愛している。  
九本の尾を持つ妖狐で、能力は高く  
主人より下された命令は難なくこなすが  
自らの発想でなにかを産み出すのは苦手らしい。

◆八雲紫◆（やくも ゆかり）  
有相無相すべての境界を操るという  
ほぼ万能な能力を持った大妖怪。  
空間に裂け目を開けて移動することから  
スキマ妖怪などとも呼ばれる。  
月の異変を調査中。



◆てゐ◆  
竹林に住むウサギの妖怪。  
うそばかりつくひねた性格だが、  
出会った者には幸運が訪れるという。  
現在起こっている月の異変の首謀者に仕えている。











無茶

ですつ



この子に  
里まで  
おつかいで  
行けなんてっ



ホラ、本人も  
やる気がある  
みたいよ?



おつかいが  
!??



そんな!  
橙にはまだ  
早すぎます!



あのね、  
そもそも...



どーして  
主人のあなたが  
餅つきをして

式の橙が  
庭で遊んで  
いるのよ!



私だっ  
てお使  
いぐら  
い一  
人で  
でき  
ます  
っ



ちえ...

橙は  
かわ  
いー  
から  
いー  
ん  
だ  
す  
う  
!



理由  
にな  
っ  
て  
な  
い  
!

藍サ  
マ...



です  
っ  
て。  
ど  
ー  
す  
る  
?

志保



ち、  
橙?

お前  
は  
無  
理  
に  
...

藍サ  
マの  
お役  
に  
立  
ち  
た  
い  
ん  
だ  
す  
っ  
!

志保





ふざけないで  
くださいっ!

橙に  
なにかあったら  
どうするんですか!

どうして…



大丈夫かなあ…

あんなのは…

まのち…



橙は  
里に出るの  
初めて  
なんですよっ

もし  
迷子にでも  
なったら…



…いい経験に  
なるんじゃない?



んー?



無事に帰ってきて  
おくれっ

ゴッゴッ



迷った...



って、それどころ  
じゃないよ  
どうしようっ！

かさ



は、



あの雲  
お団子みたいで  
おいしそう...



ちやんと  
あの雲を目印に  
してたのに...

心配だよっ  
ちエン

あなたの  
式でしょ！

そこらの  
やつらには  
負けや  
しないわよ！

悪い人間や  
妖怪に  
会わなければ  
いいけど…

そりゃあ…

私だって橙が  
負けるだなんて  
思ってたませんけど…

悪い  
友達  
が  
できて

橙が不良に  
ならないか  
心配で…！

…団地妻？

公園デビューは  
慎重にしたい  
のー！

あああ









ありがとっ  
助かるよ

えっと…

『てゐ』よ。  
空は飛べる？

かわいらしい  
子猫ちゃん。

わっ

いぬいぬいぬ

嗚呼、  
橙や…

どうか無事に  
帰ってきて  
おくれえ…

イヤイヤ…

あんたなに  
作ってる端  
全部食べて  
お団子。のよ



わあ！

あまりの  
ストレスに  
無意識に…！

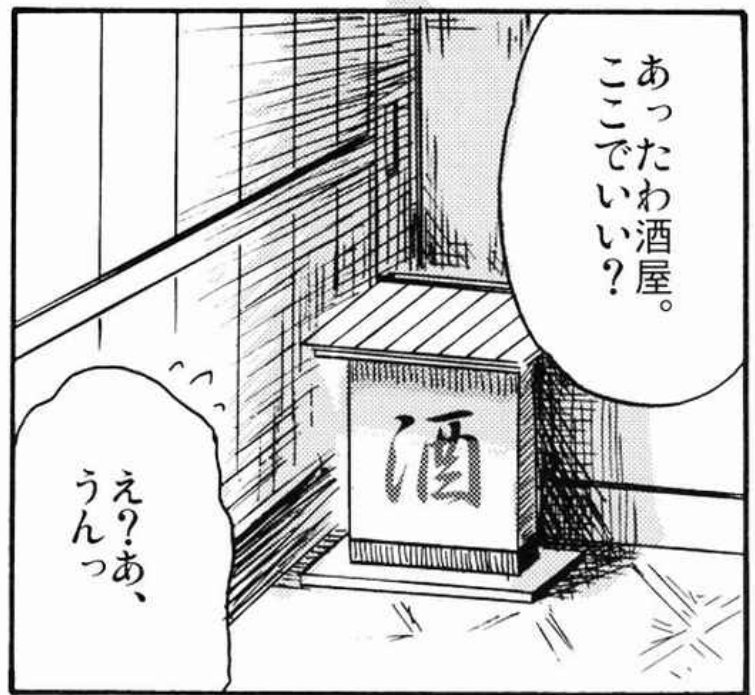
ほっ



駄目だこいつ  
早くなんとか  
しないと…







挑発的な子だなあ...

文句ってんじゃないけどさ

ホラ、最近博麗の巫女さんや霧雨のお嬢さんのマネをして酒を飲みたがる子が多くてね

親の金を盗んで酒を飲む悪ガキまでいてさ

知らない子には売らない決まりになつたんだよ

博麗様  
おかしな?

そんなんっ

博麗の...?

あう...

どうしよう、このままじゃ売ってくれないとなると...

なによっ

私がそんな不良に見えるって言うの？







あいのいね？  
…

ズン。



あいのいね？  
！

んあ

橙は自分で  
やりたのよ  
言ったのよ

主人のあなたが  
信じてあげないが  
どうするのっ

で、でも  
橙はまだ  
子供で…

式を憑かせた  
妖怪に  
子供もなにも  
ないわよっ



仮にそれでも  
未熟な所が  
あるなら

それは  
あなたの  
怠慢が原因  
でしよう！

あの子を  
あなた自身の  
保護欲を満たす  
道具にしてない？

愛玩動物じゃ  
ないのよッ！！  
あの子はッ！！







橙のあまりの  
愛らしさ故に  
甘やかし過ぎ  
たことは認め  
ます。



たしかに…



お返事

ですが…!



だからといって  
あの子のことを  
ペット扱いだなんて  
したことは

一度だって  
ないつもり  
ですっ!

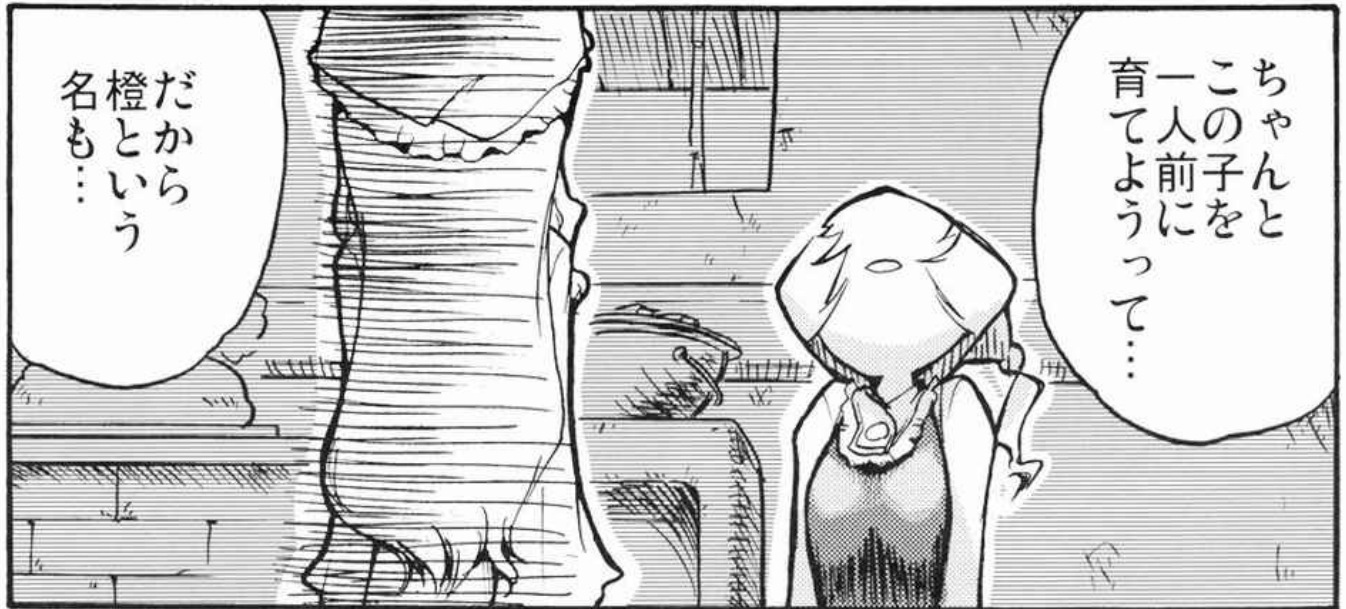




あの子を  
式神にした  
日を――

今になって  
思い出しました

.....



だから  
橙という  
名も……

ちゃんと  
この子を  
一人前に  
育てようって……



……ま、  
いいんじゃない？

思い出せたの  
なら、ね。



だめです  
ね……

いつのまにか  
そんなことも  
忘れて……

さて、それじゃあ  
今夜の準備を  
手伝って  
もらえるかしら。

橙に負けては  
いられないわ、  
私達も気合を  
入れなきゃ！

はいっ









あ、  
そうだ、  
お酒だけ  
2本だけ  
良かったの？



ああいうのを  
キツネにつままれた  
ような、って  
言うのねきつと！



うん。  
ちゃんとお月見  
できるよ  
なったらまた  
準備するって。



そうなの。  
それでね、

紫さまも  
このところ  
毎晩調べて  
まわってるみたい



月：  
ええっと

そういえば  
最近少し  
おかしいかしら



：あの  
スキマ妖怪  
自身が？

霊夢と  
一緒にね。

紅魔館も  
なにか動い  
てるんだっ  
て。



あ、

私、こっ  
ちだから。

あ、そ  
うなん  
だ



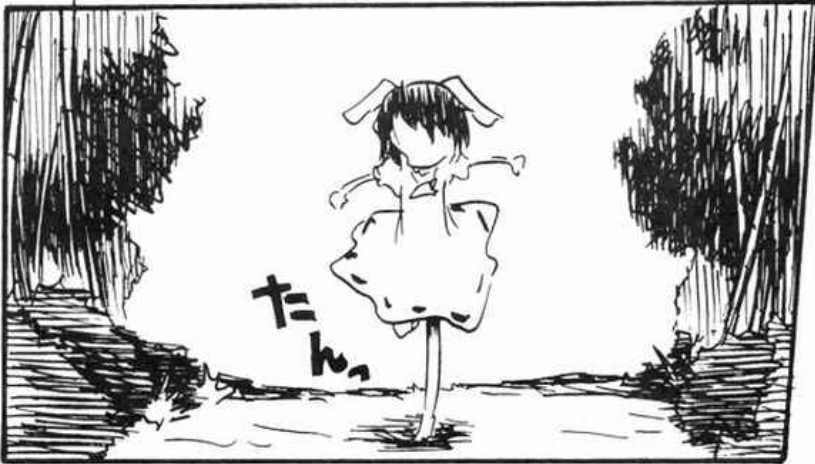
ふうん？



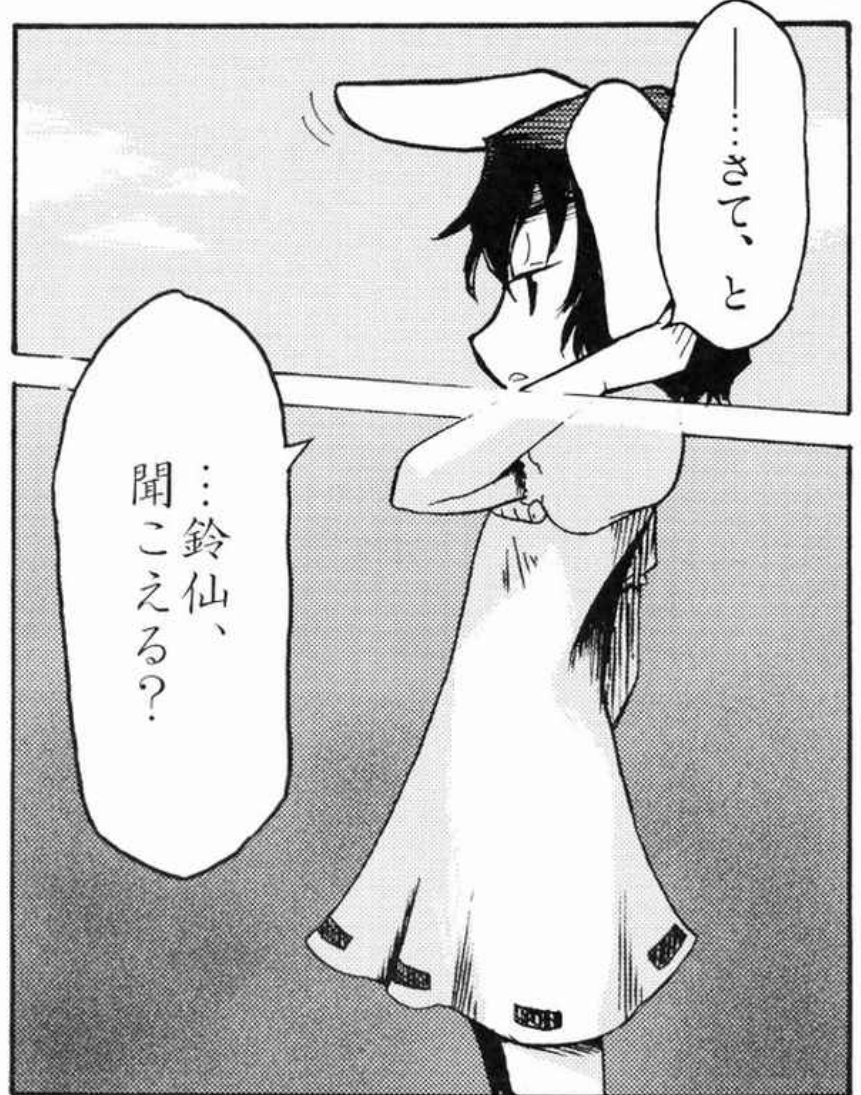
：月見、  
できると  
いいわね。



今日は  
ありがと  
ねっ  
てるちゃんっ



てぬっ!?  
何してるのよ  
この忙しい時にっ



：鈴仙、  
聞こえる？

……さっ  
と

仕事よ、仕事！  
情報収集ッ！

はあ!?

…なんだか  
宴会好きな連中が  
多いみたいなの。

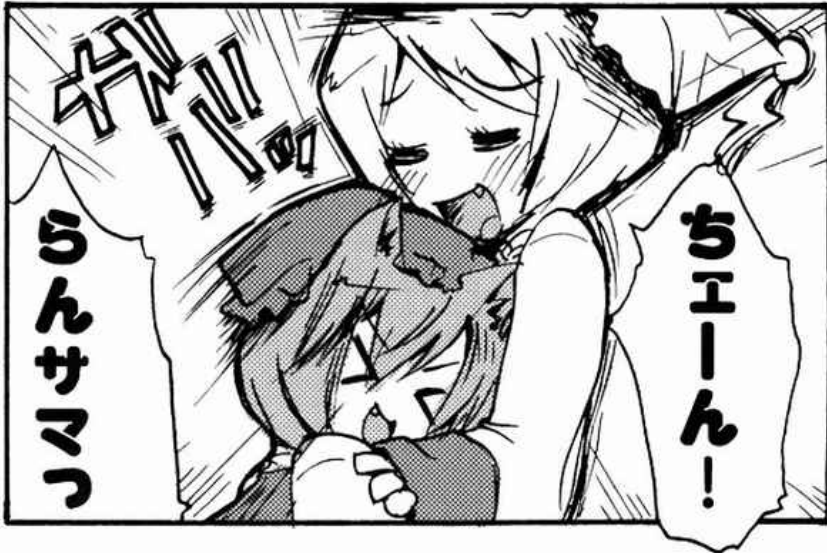
鈴仙、聞いて。  
警備の練り直しを  
上申して欲しいの。

え？  
でも…

妹紅の足止め  
だけじゃあ  
不十分ってことよ。  
屋敷を迷宮化して  
あげつのに  
誰か邪魔を  
するのよ。

月見をさせろって  
怒鳴り込んで  
来るわよ、きつと。

藍サマ、  
紫サマ、  
っ！





お酒は  
ちやんと  
買えた？

あいつ

ズ  
ッ

ン！



橙…

その、さっきは  
反対したりして  
ごめんよ。



でかしたわ  
橙！

エイ！

これは  
お酒か？



お前を  
心配するあまり  
信じて  
やれなくて…

本当に  
悪かったよ…

そんな、  
藍サマ…！







紫様の言う通り、  
守つてあげる  
だけじゃあ  
ダメだったんだ…

**あ  
ん**

この子のことを  
信じて、  
一人前として  
扱わないと…！



えっと、藍様？  
じつは今日は  
一人じゃなく…

**ん**



**橙**

は、はいっ

**あ**

**うし！**



ただけどそれも  
今日で  
おしまいだ。



今までよく  
この私に  
仕えてくれたね、  
ありがとう。

…あい？



はっ



一人前となつて  
私と対等な立場に  
なつたのだから

まっしぽん ぽんぽん

これからは  
直接紫様  
にお仕え  
してくれ。

もう私が  
守ってあげる  
必要もないね。







橙...

どーしてきつ極端に走るのはあなたには...ッ!

思い出したんじゃない? なかったの!?

あの日に誓ったことを!



紫様...



—そうでした。

本当に私は、どこまでも愚かな...



ごめんよ  
橙。

私がか  
ただけ  
なっ  
た。

だか  
から  
どう  
か  
泣  
け  
な  
い  
で  
お  
く  
れ。



橙、それは  
ちがうよ。

私がお前を  
見捨てるなんて事  
あるものかっ



藍  
サ  
マ  
…

役立たずな  
私のこと  
要らなくなっ  
て  
それであんな…

安心して、橙。  
私はもう二度と  
忘れはしないから。

今はまだ  
か弱く小さな

芽吹いたばかりの  
苗木のようなこの子が

いつかあざやかな  
橙色の実を結ぶ日まで  
守りつづけると——



——はい、  
藍サマ……。



お前を名付けた  
あの日、そう  
誓ったから……

キ、キ、キ

……



やれやれ。

こっちはなんとか  
一件落着かしら。



—ところで、  
藍。



ああ、そうだ。  
お料理もお使いも――

――  
そうだね

それじゃあ、  
お願い  
しようか。

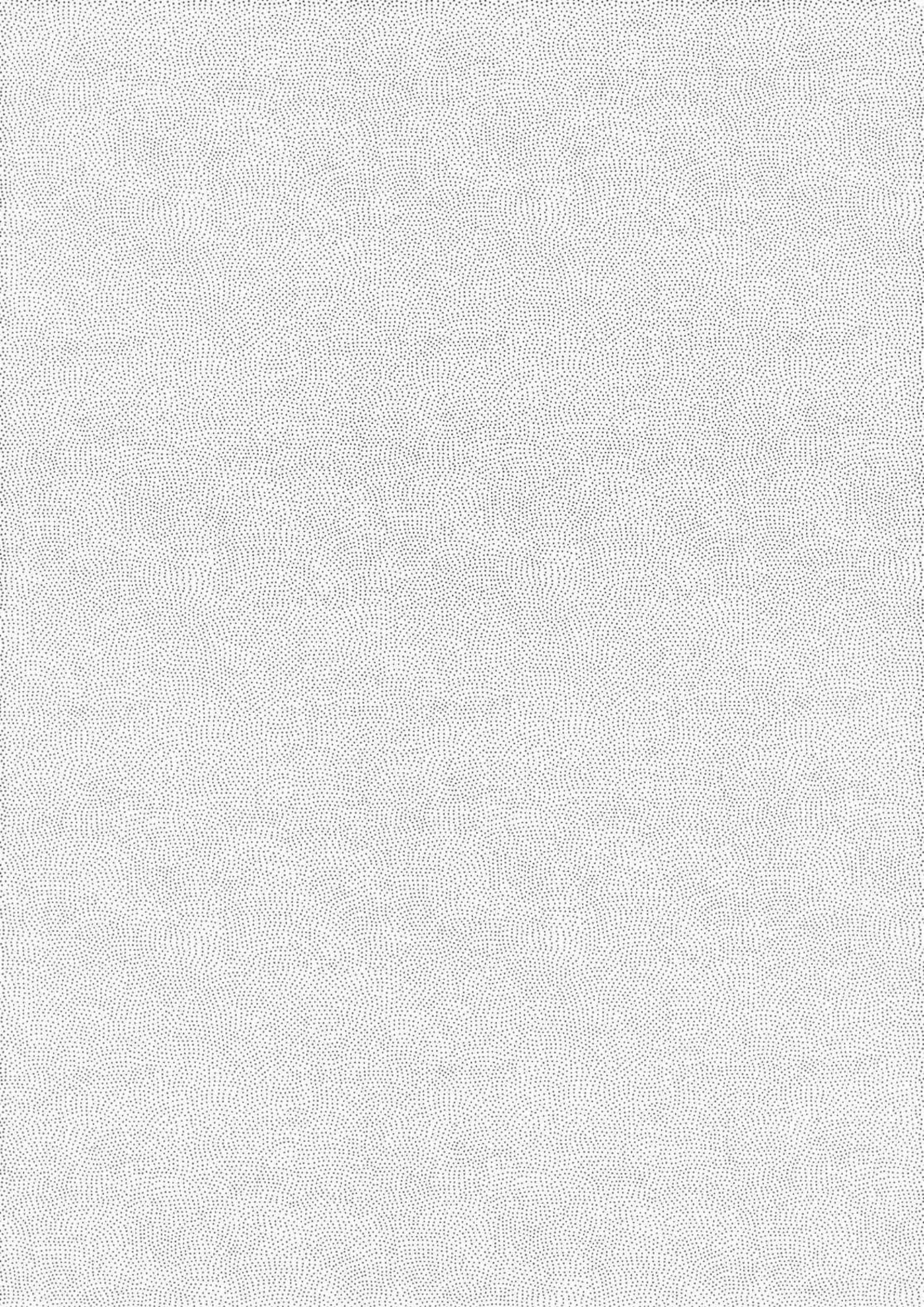
それじゃあ  
教えるから、  
しっかり  
おぼえるんだぞ？

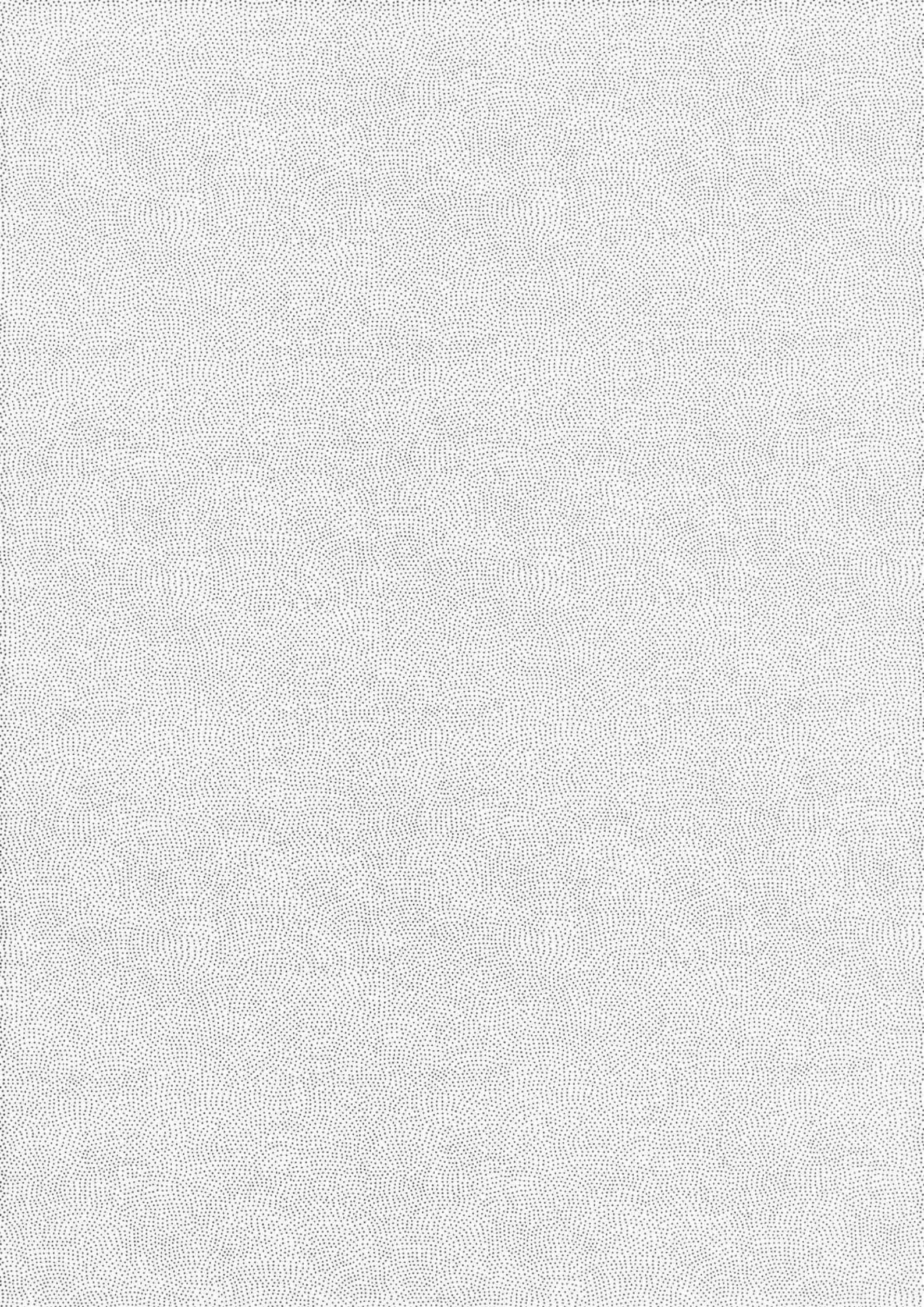
あいつ

教えることは  
まだまだたくさん  
あるのだから。

まずはここから、  
小さな歩みを――。









当然。

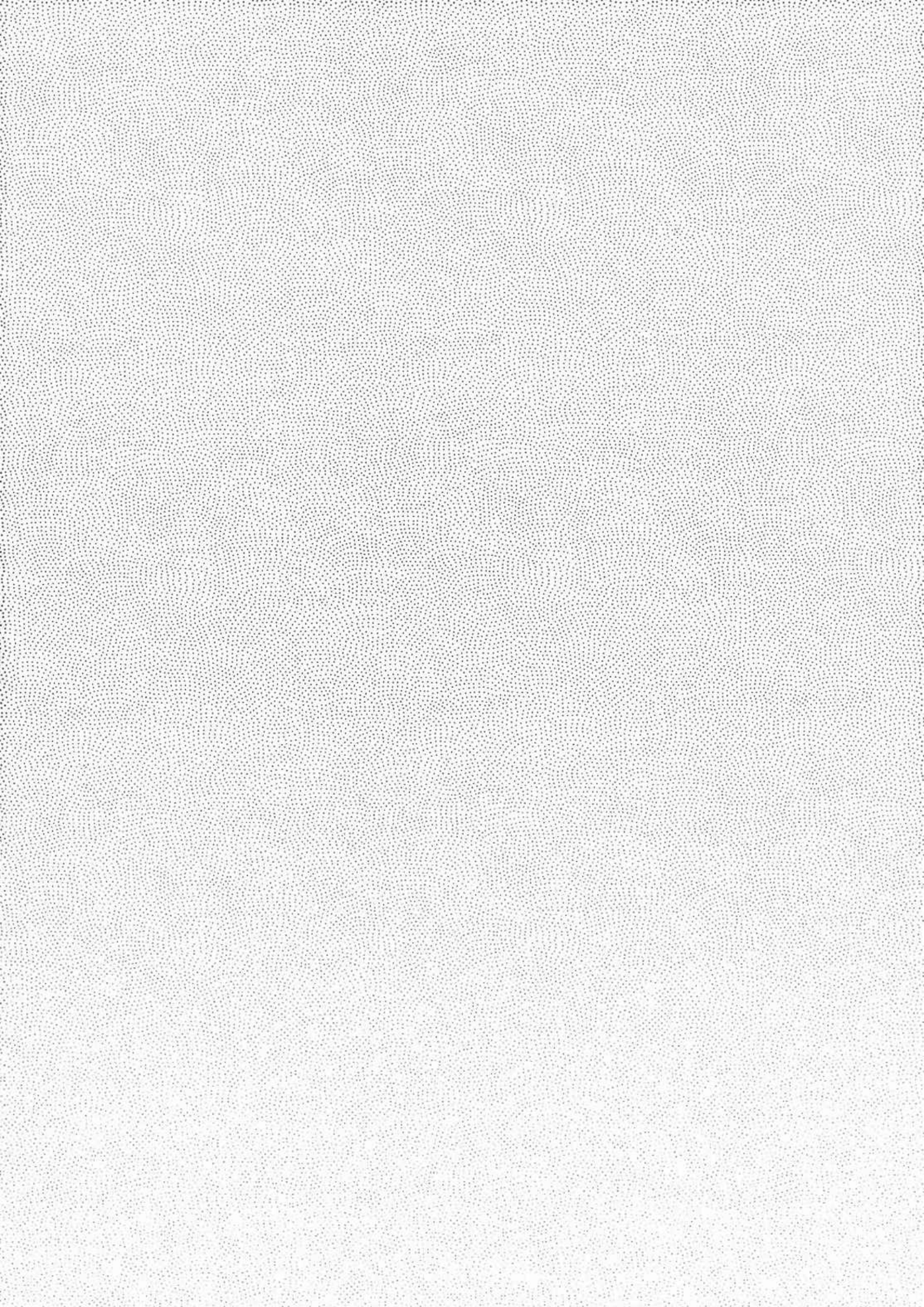
せっかくあの子  
が買ってきたの、  
お酒だもの、  
寝酒にするには  
もったいないわ。

さあ、  
行きましょう  
藍。

本当の月を  
取り戻さなきゃ。

いぬのきもち





おひさしぶりだったり、はじめましてだったり。  
ここは作者の恥ずかしい自分語りのページですので、おうちで一人のときにこっそり見てくださいね。

今回の原稿は東方ジャンルの一冊目として描き始め、一度去年の夏に筆が止まっていたものを今年になってからあれやこれやと補強を重ねてなんとか形にした物だったりします。

長い間、マンガで自分の内面から生まれるものを表現するということをずっと避けてきて、  
かろうじてマンガとしての体裁が整っただけな空虚なものしか描けなくなっていたのですが。

ある方の東方本を読んで強くショックを受けまして。  
恋愛というものの綺麗な面だけでなく、嫉妬や懐疑などの裏側の感情を、  
それもただのテーマとしてでなく生きたキャラクターの一側面として描いていることに。

ああ、同人誌というものはここまで自分自身の内面を曝け出しても読み物として成立するのだな、と。  
なにをそんな当たり前のことを、好きに描いていいに決まってるって思われるかもしれませんが。  
それを受け入れてくれる読み手がいる東方というジャンルも含めて、自分には衝撃的だったのです。

そこで改めて振り返ってみれば、自分は本来マンガというものに対して求めていたのはそれだったんじゃないかと。  
好きな作家(藤田和日郎や羽海野チカなど)の本を読み返してみると、  
作品から浮き上がる作者の心の流れや人柄を感じられるようなものを好んで読んでいたのではないかと。  
もしも手の届く同人という世界でもそういったものが受け入れられる場があるのなら。  
自分が大好きなそういった作家に少しでも近づけるんじゃないかな、と思って。  
そうやって、見様見真似どころか目隠し状態で右往左往、手のひらでこねくり回して作り始めてみた本が、  
歪で拙いながらもこうしてなんとか形となりました。

読み返すとまだまだ稚拙で、上手く表現できているとはとても言えませんが。  
それでも、読んだ方に自分の心の形がなにか伝わってもらえればうれしいです。

結果として恋愛物にならなかったのが自分らしいな、とも思います。  
年ばかりとって中身はまだまだ子供ですのでw

マンガの内容のことですこし。  
大体の方はゲームをやってらっしゃるのでお分かりでしょうが、  
この本はゲーム東方永夜抄の直前のお話となります。  
この後どうなるかはみなさんのゲームの腕前と妄想次第...ということに。

ちなみに、自分の妄想世界の展開ですと。

このあと結局、  
博麗の巫女を連れ立った八雲一家のお二人は永遠亭の無限回廊にて撃退され。  
偽りの月の波動を浴びた橙は姿を消し。  
事件の解決は夜を止めた二人の魔女の手に委ねられていくわけですが。  
その妄想のお話はまた、別の機会にでもお見せできればと思います。

それではまた、次の本で。  
2007.2.11.らいな

発行日  
初版2007年2月11日  
第二版2007年2月28日  
第三版2007年3月31日  
発行:サークルまるちら  
執筆者:らいな



まるちら